

に、この年度より「女子部新設」計画が「女子共学」即ち男女共学実施要求へ変わった。六年度年報が文部大臣に提出されたのは昭和七年五月三十日で、この日、和田英作が校長に就任した。左記の和田の文を読むと、男女共学実施計画は和田の意見を反映したものであったことが分かる。

#### 男女共学の問題

正木先生の校長在任の頃、美校に女子部を設ける話はあつたのですが、若しも許されるなら、僕は共学を實現したい。男子が通つて来る關所を、やはりくぐつてくるのでなくては駄目だと思ふ。女子だからと云ふハンデイクヤツプをつけてはいけないと思ひます。すでに私立で女子美術學校があるのだから、美校に女子を入學させることになつたら、嫁入仕度まがひのものでなく、男子と競つてやつて行かうと云ふのでなくては意味がない。たゞ問題は風紀に關すること、これを心配してゐる向きもある様だが、現在音楽學校では共学をやつてゐても、風紀の上で云々されると云ふ様なことは聞かない。私は風紀上の弊害は無いと思ふ。それに今の女は昔と違つて男子に輕蔑されまいと云ふ自尊心がありますし、又一方から考へれば、逆に風紀が却つてよくなりはしないかとさへ思つてゐます。男子の生徒の中に女子が一人入つてくれば、すべて慎む様になつてお行儀がよくなると思ひます。現在、何んにしても、同等の力を有して居るに不拘、女なるが故に男が受け得る教育を授けられぬといふ道理もなく、又、其爲めの教育機關のないのは不合理です。これは純粹美術の方のことに就

てですが、師範科の事を考へてみると、女學校の先生はどうしても女の方が男よりよいと思へる。一般論として女が男より程度が低いものとされてゐますが、假令一般には低くとも、中には優秀な技能の所有者があると思ひます。女に對して同情もあり、すべてをよく知つてゐる女の人が、其優秀な技能の所有者であるならば、夫れは女學校の先生として男子より遙かによいのはありませんまいか。仲々文部省の方では許して呉れませんが、時代が大部變つてきてゐるので、差支へはないと自分は思つてゐます。又女は男の感じない特別の世界を感じるから、女にしても男と競つて行く力のある人なら又面白い結果も得られるでせう。

〔『アトリエ』第十一卷第五号所収「和田英作氏美術漫談」より。昭和九年三月〕

#### ⑧ 和田校長による改革

和田英作は校長就任とともに教育改革に着手した。『美之國』第八卷第八号（昭和七年八月）はこれについて断片的ながら次のような記事を掲げている。

#### 美術學校の改革案

——和田校長の腕試し——

東京美術學校長に和田氏が就任して以來、氏が如何なる腹案を具體化するかが興味ある問題とされてゐたが、最近大體次の如き改革案が内定されたと聞く、課長制を設け經理課長に津田信夫氏、文庫課長に矢代幸雄氏、<sup>〔教〕</sup>政務課長に佐々木卓三氏が新任、尙

ほ結城素明氏は圖畫師範科主任となり、南薫造氏を洋畫科教〔授〕に新任。

そのため従來の圖案科勅任教授島田佳矣氏、助教千頭庸哉氏は辭職、寫眞擔任教授森芳太郎氏、圖案科助教森田武氏は休職と内定した。

その他従來美術學校と帝展との關係がよく問題とされるので、その誤解を解くため今後夏季休暇中同校生徒の帝展出品製作のため教室やクラブを使用することを禁じた。

この記事が触れている「改革案」とは、具体的に言えば一、事務



校長室における和田英作

(『東京美術學校校友会月報』第31卷第1号より転載)

分掌規定の改正、  
二、図画師範科の改革、三、図案科の改革、四、夏季休業中の教室使用禁止の四項目である。

一、事務分掌規程改正

昭和七年六月十一日、事務分掌規程が改正され、従來の各掛が廃止されて新たに經理、教務、文庫

の三課が設置された。新規程を左に掲げる。

東京美術學校教育事務分掌規程(昭和七年六月改正)

第一條 東京美術學校ノ教育事務ヲ分掌スル爲各科ニ主任及理事ヲ置ク 主任及理事ハ其ノ科ノ教官中ヨリ校長之ヲ命ス

第二條 主任ハ校長ノ命ヲ承ケテ左ノ事項ヲ掌ル

一 其ノ科ノ教育ノ方針

二 其ノ科ノ職員ノ統率

第三條 理事ハ主任ノ指揮ヲ承ケ且ツ教務課ト聯絡シテ左ノ事項ヲ

處理ス

一 其ノ科ノ生徒ノ取締並ニ賞罰ニ關スル事項

二 其ノ科ノ生徒ノ出缺及成績ノ調査

三 其ノ科ニ屬スル教室ノ管理

四 其ノ科ノ教授上ノ諸設備及材料ニ關スル事項

五 其ノ科ノ職員ノ勤務上ニ關スル事項

第四條 本校各科ニ課スル共通學課ヲ管理スル爲學課主任及理事ヲ

置ク 學課主任及理事ノ任命及職務ハ各科主任及理事ニ準ス

東京美術學校事務分掌規程(昭和七年六月改正)

第一條 東京美術學校ノ事務ヲ分掌スル爲經理課教務課及文庫課ヲ

置ク

第二條 經理課ハ本校經理ニ關スル事務及庶務ヲ掌ル 經理課ニ庶

務掛及會計掛ヲ置ク 庶務掛ハ左ノ事項ヲ掌ル

- 一 御眞影及 勅語ニ關スル事項
- 二 儀式ニ關スル事項
- 三 校長官印及校印ノ管守
- 四 一般ニ關スル諸規則ノ立案
- 五 文書ノ接受及配布
- 六 他掛ニ屬セサル文書ノ立案及往復
- 七 他掛ニ屬セサル文書諸帳簿ノ整理及保管
- 八 職員ノ進退、身分及服務ニ關スル事項
- 九 職員ノ出張及在外研究ニ關スル事項（教務課ト協議）
- 十 宿直ニ關スル事項
- 十一 寄附ニ關スル事項（寄附物件所管ノ課或ハ掛ト協議）
- 十二 卒業生ニ關スル事項（教務課ト協議）
- 十三 一覽、統計及報告ニ關スル事項
- 十四 庶務掛室、校長室及其ノ附屬應接室ノ管理
- 十五 他掛ニ屬セサル事項
  - 會計掛ハ左ノ事項ヲ掌ル
    - 一 歳入、歳出豫算、決算及收支ニ關スル事項
    - 二 會計ニ關スル諸規則ノ立案
    - 三 會計ニ關スル文書ノ立案及往復
    - 四 會計ニ關スル文書、諸帳簿ノ整理及保管
    - 五 官有財産及資金ノ保管ニ關スル事項
    - 六 物品ノ購入、出納、保管及修繕ニ關スル事項
    - 七 物品ノ貸借、讓與及賣却ニ關スル事項
    - 八 土地、建物ノ監守、營繕及洒掃ニ關スル事項
- 九 依囑製作ニ關スル事項
- 十 警備及衛生ニ關スル事項
- 十一 備人ノ進退及取締ニ關スル事項
- 十二 會計掛室ノ管理並ニ他掛ニ屬セサル建物及諸室ノ管理
- 第三條 教務課ハ本校各科ニ於テ分掌スル教育事務ヲ集合整理ス
  - 教務課ニ教務掛及生徒掛ヲ置ク
  - 教務掛ハ左ノ事項ヲ掌ル
    - 一 教課ニ關スル事項
    - 二 教務ニ關スル諸規則ノ立案
    - 三 教務ニ關スル文書ノ立案及往復
    - 四 教務ニ關スル文書、諸帳簿ノ整理及保管
    - 五 教官ニ關スル教務上ノ事項
    - 六 教官會議ニ關スル事項
    - 七 生徒ノ入學、競技、試験及卒業ニ關スル事項
    - 八 生徒ノ退學ニ關スル事項（生徒掛ト協議）
    - 九 生徒ノ成績、勤惰等ノ調査及報告（同前）
    - 十 生徒ノ賞罰ニ關スル事項（同前）
    - 十一 休業及休暇ニ關スル事項
    - 十二 修學旅行ニ關スル事項
    - 十三 生徒ノ願届等ニ關スル事項（生徒掛ト協議）
    - 十四 講演會及講習會ニ關スル事項
    - 十五 參觀人ニ關スル事項
    - 十六 教室ノ管理
    - 十七 教務掛室ノ管理

生徒掛ハ左ノ事項ヲ掌ル

- 一 生徒ノ訓育並ニ風紀及思想取締ニ關スル事項
- 二 生徒ノ身分及素行調査ニ關スル事項
- 三 生徒ノ保健ニ關スル事項並ニ醫務室ノ管理
- 四 生徒ノ福利増進ニ關スル事項
- 五 生徒控室ノ管理並ニ其ノ出入商人ノ取締ニ關スル事項
- 六 生徒ノ集會、揭示及印刷物ノ取締ニ關スル事項
- 七 校友會ニ關スル事項

第四條 文庫課ハ本校教授上ニ必要ナル圖書及標本類ニ關スル事務

ヲ掌ル 文庫課ニ圖書掛及標本掛ヲ置ク

- 一 文庫ニ關スル諸規則ノ立案
- 二 文庫印ノ管守
- 三 文庫ニ關スル文書ノ立案及往復
- 四 文庫ニ關スル文書、諸帳簿ノ整理及保管
- 五 圖書ノ請求、受入、整理、目錄編纂、保管、出版及閱覽ニ關スル事項

六 出版及著作權ニ關スル事項

七 文庫、文庫課事務室及閱覽室ノ管理

標本掛ハ左ノ事項ヲ掌ル

- 一 標本ノ請求、受入、整理、目錄編纂、保管、出納、閱覽及陳列ニ關スル事項

二 標本ノ製作及修繕ニ關スル事項

三 展覽會ニ關スル事項

四 陳列館及陳列室ノ管理

第五條 各課ニ課長ヲ置ク 課長ハ本校教授及生徒主事中心ヨリ校長之ヲ命ス 課長ハ校長ノ命ヲ承ケテ其ノ課ノ事務ヲ管理ス

第六條 各掛ニ掛長ヲ置ク 掛長ハ上司ノ指揮ヲ承ケテ其ノ掛ノ事務ヲ掌理ス

第七條 主掌事務ニシテ他掛ト聯繫アルモノニ就テハ當該掛ト協議ノ上處理スヘキモノトス

第八條 各掛員ハ特ニ命令アルトキハ他掛ノ事務ヲモ補助スヘキモノトス

〔昭和七年東京美術學校事務分掌規程(東京美術學校)六月改正〕

この改正は正木校長時代からの懸案となっていたものであるが、教育改革を行う前段階として、学校管理体制を整備するために実施したと考えられる。

二、図画師範科の改革

和田校長は昭和七年九月発行の『美術新論』第七卷第九号に次の文を寄稿して教育改革に関する所信表明を行なった。

かく信じ、かく行ふ

和田 英作

美術教育の意義

私が東京美術學校〔校長〕の重任を拜命して一日、生徒一同を集めて、就任の挨拶をしたが、それは美術教育の一隅に立つて、これまで作家として教授として實際に體驗した所感と、新に拜命した使命



を、これから實行しやうとする抱負の一端ではあつたのだが、美術に深い關心をもたれる校外の方々にも聊か参考になりはしないかと思はれるので、こゝに再びこの言をなすことにした。

美術學生が、學生生活を送る間は最も大切な基礎工事の時代であらうと思ふ。基礎事業がなか／＼かゝつて、しつかり出来てゐるほど、その上に大きなものが組立ち得るのである。素人や子供の繪が面白いことがあるが、美術學校を十年やつても展覽會の入選に苦まなければならぬのに、基礎工事が粗雑なものが、思ひ付や、ちよつとの才で一時人目を眩惑することも出来やうが、すぐ本質が枯れてしまふと思はれる。初めて入選したきりでその後消息を絶つたのはその間のことである。基礎のない上には決して本當の美術は出来ない。少くも學校にある五ヶ年間はみつちり地味に勉強してほしく、在學中展覽會へ出品することを別段獎勵はしたくない。他日大に雄飛するために、啼かず飛ばず、十分の基礎的營養を養つてほしい。

と同時に、今から遠大な理想をもつてほしい。他日巢立つて飛び出したら大きいぞと思はしめる意氣と覺悟がなくてはならぬ。どつちへ飛ぶか目標をはつきり見定ることである。

學校は學生を取り締りたくない。立派な志をもつた大切な若者として待遇したい。

人間として此の心の修業といふものは、同時に美術家としての修業に缺くべからざるものであるが、特に學生に希望したいことは自らを偽らぬ眞直な心の持主となることである。自らを偽らぬことは屢々他人を偽らぬことよりも難しいことで、これが藝術家

として最も大切なことである。場當りの制作をすること、術ふこと、流行に媚びることこれらはみなその自らの心を偽るところから出るもので、藝術上最も唾棄すべきことだと思ふ。

藝術はどこまでも個人のものである。學生は他日作家として立ち、思ひ思ひの制作をしてよい。一人一人異なる作家が出来てこそこの國の藝術の進歩であり、又、藝術の面白さも尊さもそこにあると思ふ。その場合自らの心に信ずるところに従つて、正直な眞摯な作をしなくてはならぬ。如何に裝ふても自分の心以上のものは現はれるものではない。朗かな素直な心でなくてはよき美術は決して生れない。

美術家として心を養ふ修養はいろ／＼あらうが、よく先輩の言を味ひ、古來の名作を學び、自らの糧をとることに努むべきである。

美術學校全體が職員も生徒も、日本の美術のために——といふ一つの理想の上に協力して、日々の業を喜んで力一杯にやつてゆく。さうして學校を朗かな自由な樂園にしたいと私は希望する。私も出来るだけ學生と親しんで相談にのり、遠慮のない忠告もしたいと思ふ。

#### 圖畫師範科を改造す

私は圖畫師範科をかく信じて、改革を斷行したのである。

もと／＼私は、師範科を稱するものは、高等師範學校にあつていゝものであつて、美術學校は純粹の作家を出すところで教育家を作るところでないとの信條を教授時代にはもつてゐた。がいよ／＼校長の位置にすはつて美術學校全體の機構を見渡す立場にた

つと、なか／＼そんなものではなく、この自論を棄てなければならなくなつた。卒業生は中等學校の男女子の教師となつて、直接國民に觸れ、その効果と影響は重大なものでなければならぬ。

美術學校に師範科が出来て永年になり、卒業生も數多く出て、この重大な仕事に當られてゐ、立派な成績もあげられてゐる。さうなつてみると師範科の存在理由は重く且つ大きい。校長になつてやめるどころでなく、却つてこれを擴大して完全なものにしなければならぬことを痛感した。

理由は他にない。本科はもと／＼藝術家をつくる目的であつて五ヶ年學校生活をして、卒業した場合、美術の基礎教育を授けてやれば目的は終る。卒業の意味は五ヶ年の基礎教育をうけたといふ證明であつて、之れからは自己の天分に從つて自己の道を開拓すべきである。その道を拓くための基礎的なものを與へられるのである。一生涯をゴールにするトラツクへ投りこまれ、競技權を與へられた、その機會を『卒業』とした。それが本科生に與へる教育の義務である。

師範科になると、その趣きを異にし、現制度によると在學僅かに三年、在學中に圖畫は勿論、手工、書道等教員たる資格に必要なものを全部を授けなければならぬ。三年後に卒業した場合、直ちに學校教師として就職し、その日から若い人々を教育する重大な責任者となる。三ヶ年の間に完成した人間を作らなければならぬ。一方の本科は基礎教育さへすれば事足りるのに、他方の師範科は完成した人格者を社會に送らなければならぬ。異つた立場におかれてゐる。

今一つの側面がある。東京美術學校の師範科卒業生は一般世間からは如何なる展望を持たれてゐるかを知らねばならない。高等師範其他の學校の圖畫師範科卒業生などと比較して、東京美術學校は日本畫、洋畫、手工の基礎となる彫刻、その他金工、鑄造、蒔繪と各部門に分れてゐてもそこには當代一流の作家を教授として本科にもつてゐる。

師範科の卒業生が教師として中等教育に當る場合、勿論藝術教育を與へるのではなく、普通教育の一過程としての正確なる觀察力の養成、趣味性の涵養によつて情的方面の教育をなすので、藝術家をつくる教師になるのではないが、然し普通教育の一部に參與するにしても、教師自らは確かな技術をもたねばならぬことは論を俟たない。美術學校卒業生である以上、技術は優秀であらねばならぬと世間一般の期待を持たれることもまた止むを得ない。然るに在來の美術師範科は、〔美術學校圖畫師範科〕教授は師範教育家だけかためてゐる、果して世間の期待に添ふてゐるか否か——甚だ疑問とせざるを得なくなつた。

そこで、何としても師範科を立派なものに改造し、世間の期待に添ふことを決意した。

世間には圖畫教師は相當行き亘つてゐる、多くを送る必要はないが、冀くば質のよい、人格、技術の達成した人を送りたい。量にあらず、質を以て世間の展望にお酬ひしたい。在來の規模より一層擴大し組織化して大師範科にしたい希望をもつた。改造の第一歩として結城素明君を以て主任になつて戴くことになつた。結城君は他に繁多な仕事があるので、幸にして本科には技術識見

に於て當代一流の教授がゐられるから、その方々にお願ひして助けて戴き、日本畫、西洋畫、彫刻、手工方面に教鞭をとつて戴くことになつた。教授も生徒も封建時代的な、本城に籠るやうな考へを棄て、本科、師範科といふ障壁を撤去し、親和し、融合して自由な學園としたい。教授の遣り繰りは勿論、教材も共通して本科生、師範科生の區別なく、兄弟となり、友朋となつて、明るい朗かな藝苑を作る考へを以て、今度の師範科大改造を斷行したのである。

#### 錦巷會を校外に移す

師範科の教師、在學生、卒業生によつて、錦巷會と稱する團體を作つてゐたが、その最近の動きを見ると圖畫教科書その他に關して聞くも忌はしい噂をきくので、かく決意したる以上この團體をも整理すべきであると考へた。この團體は全く營利本位のものとする外はなく、私は錦巷會の幹部と語つて、錦巷會と營利とを切離すか、切離し得ぬとすれば事務所を學校外におくことを要求した。もし錦巷會が營利事業を切離すことが出来なれば營利團體と認め、生徒の参加をかたくお斷りすることを宣言した。結局、營利と切離すことが不可能とみえて、昭和七年七月二十二日の日附を以て錦巷會の事務所を理事長の私宅におくことになつた。私の要望の如く學生を會員にしない。そこで錦巷會を營利團體と認める外なくなつて來た。

この科の卒業生が相互扶助、親睦、研究の目的を以て、別個の團體なり、會を作るもよく、學校全體の校友會の中にこの科の卒業生の機關を作るもよからう。校長としては私は當分その成行を

靜觀してゐたい。

#### 教室貸與問題

彫刻科を中心にした教室貸與問題にもまた一言ふれて見たいと思ふ。

先學期を終る時、教室を借りる要求が各科から出てゐた。中には帝展出品製作のためだといふ。十何年以前から彫刻科では夏季休暇中と雖も教室を使つて、生徒に製作をやらしてゐた。恐らくそれは平常の學習のためであつたであらう。中により制作があれば勸めて帝展に送つたものだと思ふが、今年マルクスの赤い思想の影響であつたか、彫刻科以外の各科から一樣の希望をのべて來た。學校當事者としても、かうしたことが毎年に行はれるとすれば、餘程慎重に考へなければならぬ。例年の如く彫刻科だけに貸して他に貸さないとすれば、勢ひ學生に不平を起させ、平和なるべき學園を騷擾させることになる。それに貸すとすれば、監督者側としては、教師を以て取締らなければならぬ。教師側からいへば仕事の上に九月から翌年の七月までの一年の教授課目の分擔が出来てしまつてゐる。夏休みまで出勤して載く譯にはゆかぬ。教師としては休みに次學期への準備もあり、健康も考量されやう。學校としては生徒の要望を要望としてのみ聞くことは出来ない。それに附隨したいろ／＼の問題がある。そこで全體の方針を決定する機會に遭遇したことになつた。今まで先例のない教授會まで開くことにして、講師で理事をされてゐる方々までの集りをねがつた。そこで私はその議事に移る以前に一言自己の所信を述べなければならなくなつた。

教室借用の希望の中には、帝展制作をしたいから借せとのことである。學校も帝展と同じ文部省所轄のことであるから生徒は漫然と考へてゐるかも知れないが、學校は帝展とは全く官制上別のものである。然るに近年帝展審査員と出品人とが贖職問題を惹起して、事件が検事局の取調べまでに及んで、まことに悪々しき限りだと思つてゐた。美術學校の教室を借し、美術學校教授であり、兼ねて帝國美術院會員、若しくは審査員である人が監督の任に當るとすれば、恐らく世間の疑惑を招くものと思はなければならぬ。教室貸與に關しては御相談上げるのみではない。この和田が職責上要求したいと思ふ、帝展出品制作のために校舎、空地は愚か、本校の息のかゝつた場所は一切貸與しない。それは本校の名譽と神聖にかけて御承知下されたい。甚だ專横の仕打ではあるが諸君も諒とせられたい。これから開いて戴き單に技術の練習、このことだけは既定の事實としてふれないで戴き單に技術の練習、補習の意味だけについて教室を貸與すべきか否かを審議を願ひたい。といつたことであるが、一人の異議者もなく、承認された。教授會でよく研究したことはあつたが、彫刻科などはもう準備にもかゝつてゐる、旁ら歎願の意味や、怨言まで言つて來たので、同情すべき點もあつて、學校としてではなく、個人の立場で、他諸教授とも諮つて、バラツクでも借りてはといふことになり、日本美術協會の半分を借りることにしたのであつた。

美術學校の學生が在學中に帝展へ出品することを甚だ不滿に思ふもので、前言した如く學生時代は基礎教育、準備教育をうける時期で、作家としては卒業してからで充分であると思ふ。帝展に

在學生で彫刻など出品するものがあるが、殆んどエチュードに終つてゐる。あれでは出品の意義をなさないと思ふ。中には早熟的に早くから作家的素質をみせるものもあり、斷じて出品すべからずといはないまでも、餘程美術學校としては考へなくてはならぬ問題だと思ふ。

美術學校と帝展の關係を明にす

もと／＼私の自説としては帝展は日本全體の帝展であると思つてはゐるが、世間でいふ如く、會員、審査員から入落の問題まで美術學校卒業生が優待されてゐるといふ非難がありとしても、それは喜ぶべきことではないかもしれないが、事實止むを得ないと思はれる。美術學校卒業生は、事實長年の基礎教育をうけただけに、いよ／＼最後のゴールに入る時は、他に比して多數の選手權を獲得するのであらうと考へられる。が美術學校によつて帝展を壟斷することは斷じて唾棄すべきであらう。

帝展は帝國美術院から切離すべきが本當であつて、院は展覽會をやるだけの骨折を、私設の團體にもわたしてしまふことが必要である。私設團體には金で補助するか、賞を與へるか、作品買上げによつて、廣く他の團體にも均霑すべきだと思ふ。展覽會だけが院の事業であると思はしめることはいけない。そこに氣付いたか、明治大正美術家の傳記編纂といふことが起つたものであらう。

私の自説として、黒田「清輝」院長の計畫に參與したことがあつたが、院長の早世と種々運用上に支障を來し、實現し得なかつた。會員は審鑑査に掌はらず、これを帝展委員に渡し行く／＼は

私の團體を形つずくる母體としやうとしたものであつた。私は未だにその自説を棄てやうとは思はない。

### 私一個人の辯明

最後に私個人のことに関し一言辯明を許されたい。私が美術學校長の職に就いたからは自己本義の立場である繪を描かぬといふことに關し、種々忠言にも預り、憶おぼれも加へられてゐるが、事實に於て、こゝ當分は繪を描く慾求も動いてゐるが、校長事務幅濶のため、しないといふのではなく、できない事情にある。しないといふことと、できないといふことには事實の現れに區別はないが、内面的には異りがある筈である。が、事實出來ないので、私のやうな頭腦の所有者にはこの使ひ分けができさうにもない。

以上一言愚見を述べて本誌の責をふさぎたいと思ふ。

ここに明らかなように、改革の第一歩は図画師範科の改革であつた。正木直彦は校長を辞して間もない頃、同科について次のように述べている。

それから今一つ私が關係した事柄に就きまして、明治四十年に師範科を新しく設けたことであります。其の時の文部省の當局者と意見が一致しまして、當局の採用するところとなり、今日に至るまで二十年、これも相當に成績を擧げてゐます。此の制度は出來ました時には相當効果のあつたものであります。已に創設以來二十年の間、少しも變らないことをやつてゐますので、時勢に合して、世間の進歩に伴つて常に其の魁をする爲めには、殊に全國

の中等學校の圖畫教育に關係があるのでありますから、これは追々新時代に適應するやうに改革して頂きたいと思ひます。

〔正木前學校長の生徒一同に対する挨拶の辭〕『東京美術學校校友會月報』第三十一卷第三号

そして、その改革方法は昭和七年度年報の「図画師範科作業科設備費」および「図画師範科ニ作業科ヲ設ケ修学年限ヲ四年ニ延長スル件」において示された。

和田は正木の構想を継承して文部省に要請を續けてゆくこととし（ただし、四年制が實現したのは昭和十七年、澤田源一校長時代のことである）、当面、優秀な技術、人格を備えた教師を養成するための人事改革を実施したのであるが、そこには六一〇頁に記したやうな同科生徒たちによる改革運動も多分に反映していたように見える。なぜなら、和田が実施した人事刷新、錦巷会改革は即ち生徒たちの要求項目だったからである。人事改革の結果は主任平田松堂、理事三浦直政の退職と結城素明の主任就任、松田義之の理事就任、多賀谷健吉、伊原宇三郎、小塚新一郎、比田井天来、比田井小琴の新採用および本科の有力な実技教官の兼任による実技指導という形をとって現われた。

新田教官について言うと、平田松堂（第二卷79頁参照）は昭和七年十一月三十日に退官するまで主任として科を統率するとともに日本画実習を指導した。彼には佐々木信綱門下の歌人として『木』『百姓の短歌』『思父抄』『故郷山形』などの歌集があり、本校校友会の短歌部は彼が部長をしていた頃は活動が大変活発であつた。教え子

の世話をよくして貧しい者には生活費を援助したりしたという。敗戦前後の困難な時代を経て昭和四十六年に死去するが、その二年前に教え子たちによって米寿祝賀会が催され、『平田松堂先生米寿記念』（編集発行代表者武井勝雄）が刊行された。その中に水田荘介（昭和七年卒業）は次のように記している。

先生を部長としての短歌部は楽しかった。秋ともなると鎌倉や千葉の海岸などへ吟行と洒落こんだものだが、佐貫の海岸へ行つた時である。当時の短歌部は字あまりなどでんで無関心で、三十一文字を守っている私の歌など全く不評で多分に癪にさわっていたので思い切つて長いを出してみた。『紫の残像が眼に一杯になつて何も見えないのに何と言う強い香いだ椎の椎の花』。処がこれが大当りを取つたので本人も啞然としたが、この時感覚は新鮮だが矢張り長すぎると注意してくれたのが先生だった。それ以後暫らく私に残像君の異名がついたのは笑止だった。

当時の部員の短歌を纏めて『又手集』と言う歌集をつくつてくれたのも先生だった。残念ながらこの歌集はなくしてしまつたがその中に収められた私の歌、『冬来れば胸痛むと聞く母を遥々と、思ひ出づ不図かぜにふせりて』が『冬来れば胸痛むと聞く母を母を……』と直つていた。勿論先生が添削してくれたのだが、二度繰り返し返した『母を』に私の胸が痛くなつたのを懐しく又有難く思ひ出される。

松堂の辞任に先き立つて後継者的立場にあつた助教教授の三浦直政

も辞職した。三浦は明治三十年大分県生まれ。大正十年同科卒業後熊本県第二師範学校教諭となり、外に同校舎監、同県視学委員などを勤めた後、昭和三年母校助教諭となり、同科の手工、自在画の授業を担当。辞職の前日付けで教授に昇格している。

次に新採用の教官について言うと、昭和七年八月三十一日に教授に任命された多賀谷健吉は明治十七年十一月十二日東京に生まれ、府立城北尋常中学校を経て本校日本画科に入学、同四十年卒業し、神奈川県立高等女学校、同女子師範学校教諭を経て同四十四年奈良女子高等師範学校助教諭、次いで教諭、教授となつた人で、図画教育法授業および日本画実習指導において実績があつた。随筆『洗筆余滴』（昭和十七年、福村書店）を遺している。

伊原宇三郎は和田校長就任前の四月五日に講師として採用され、図画師範科の西洋画実習を主として担当することになった。彼は明治二十七年十月二十五日徳島市に生まれ、大阪府立今宮中学校を経て大正五年本校西洋画科に入学、同十年卒業し、同十三年十二月農商務省海外実業練習生として渡仏、昭和四年七月帰国し、翌五年四月から帝国美術学校助教諭をつとめていた。作家としては大正九年第二回帝展に初入選し、滯仏中はサロン・ドートンヌに二度入選し、昭和四年、五年と帝展特選が続いて無鑑査となつた。

同じく小塚新一郎も同月二十二日に講師に採用された。彼は明治三十六年三月十二日横浜に生まれ、第一横浜中学校、青山学院高等部を経て東京帝国大学文学部の聴講生となり、大正十五年渡独、ベルリン大学に入学した。以来卒業までの五年間に哲学、教育学、心理学、倫理学、論理学、美学、美術史、音楽史、西洋史、独文学、



経済学等の科目を聴講する傍ら、哲学および教育学科正教授、ドクトル・シュプランガーの研究室に入って哲学、教育学、心理学、倫理学を研究し、また、哲学科正教授、ドクトル・ハインリッヒ・マイヤーの研究室で哲学（特に論理学、認識論）を研究。昭和六年五月学位請求論文「カントニ於ケル神ノ証明ニ就イテ」を両教授に提出し、次いで七月の口答試験を受けて合格し、ドクトル・フィロゾフ・イエーの学位を受け、同年十二月に帰国した。本校には矢代幸雄の推挙により起用された。小塚の起用は実習教育の充実と同時に基礎理論の教育を確立しようという意図を示すものと見られる。

小塚の授業に関しては哲学概説高等科教員免許状下付（無試験。昭和十四年一月二十七日下付）申請の際に作成された文書が参考になる。すなわち、そこには昭和七年度には「教育学」（教科書使用せず）を、同八、九、十年度には「心理学」「哲学概論」（波多野精一著『哲学史要』を教科書に使用）「教育学」を講じ、同十一、十二年度には教科書を使用せず上記三科目を講じ、同十三年度には「心理学」（教科書使用せず）「哲学概論」（シュプランガー著『文化哲学ノ諸問題』を教科書に使用）「教育学」（シュプランガー著『現代文化ト国民教育』を教科書に使用）を講じたことが記されている。また、彼にはシュプランガー原著の翻訳『文化教育学研究』（昭和十年、刀江書院）『文化哲学の諸問題』（同十二年、岩波書店）『現代文化と国民教育』（同十三年、同上）があることが同文書に附記されている。

比田井鴻（号天来）と比田井元子（小琴）は岡田起作の後任としてそれぞれ七年四月三十日、翌八年五月二十五日に講師として採用

された。天来は明治五年一月二十三日長野県に生まれ、哲学館、二松学舎に学び、特に書は日下部鳴鶴に、詩は岡本黄石に学んだ。明治三十四年以降東京陸軍地方幼年学校、東京高等師範学校で習字を教え、教員検定委員会臨時委員をつとめたが、昭和二年十月には代々木に書学院を設立し、以来著述に従事していた。天来の起用も矢代幸雄の推挙による。

小琴は天来の妻。旧姓を田中と言い、明治十八年六月三日に東京に生まれ、日本橋区有馬小学校高等科、国語伝習所に学んだ外、阪正臣に和歌や国文、書道を学び、同四十三年から大正十二年まで鎌倉高等女学校の講師として習字を教えた。天来および小琴については中西慶爾著『比田井天来伝』（昭和六十一年、木耳社）があり、天来の郷里長野県北佐久郡望月町には天来記念館（昭和五十年開館）がある。

新しい教授陣は『東京美術学校一覽（昭和八年）』の「職員」（56頁参照）に明らかだが、実情をより具体的に記した教員表が現存するので左に掲げる。ただし、こちらの表には比田井小琴の名が欠落している。

図画師範科担当学科目並びに事務

昭和八年四月調

担任学科目	毎週時間数	官職名	氏名	備考
同 日本画	四七時	教授	結城 貞松	主任
同 助教		平福 貞蔵		
同 助教	同	教授	山田 廉	事務分担
同 助教		松垣 靄雄		

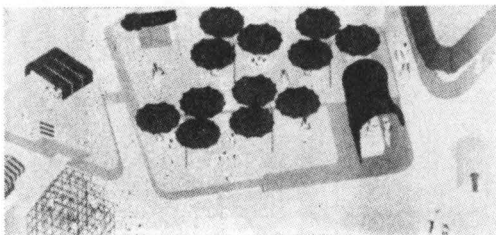
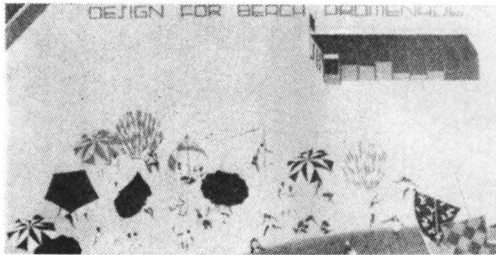
油画及び木炭画	四二時	助教	南 薫造	事務分担
手工、彫塑	二一時	助教	伊原宇三郎	
教授法及び教授練習	五時	助教	関野金太郎	事務分担
修身	一時	同	松田 義之	
修身	一時	同	多賀谷健吉	事務分担
哲学概論、心理学、教育学	六時	講 師	佐々木 卓	
習字	六時	同	高島 米峰	事務分担
東洋美術史	九時	同	小塚新一郎	
西洋美術史	二時	同	白川 一郎	事務分担
美学	二時	同	比田井 鴻	
図案法及び図案実習	二時	助教	田辺 孝次	事務分担
英語	二時	助教	青山 新	
同	二時	助教	村田 良策	事務分担
同	二時	助教	村田 良策	
体操	六時	配属将校	奥野 由郎	事務分担
		講 師	齋藤 幸晴	
		嘱託	清水 平吉	事務分担
		同	同	

〔大正九年要書類綴教務掛〕より  
十二月

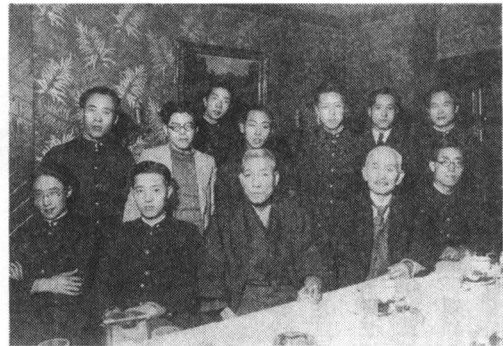
なお、図画師範科改革項目のうち錦巷会改革については和田英作の「かく信じ、かく行ふ」に明記されているので、再言を要しない。

### 三、図案科の改革

図案科の教授陣は主任の島田佳矣が明治三十五年、理事の千頭庸



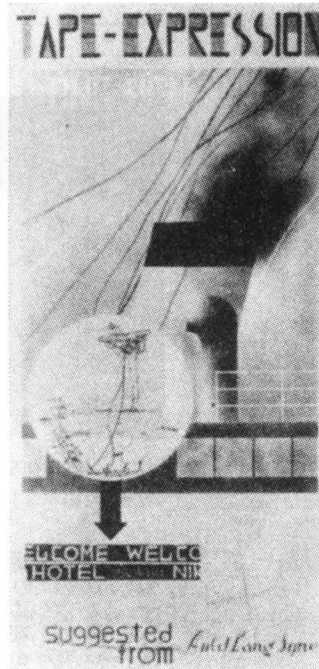
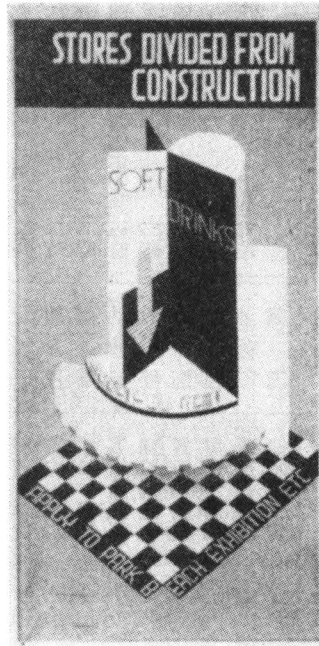
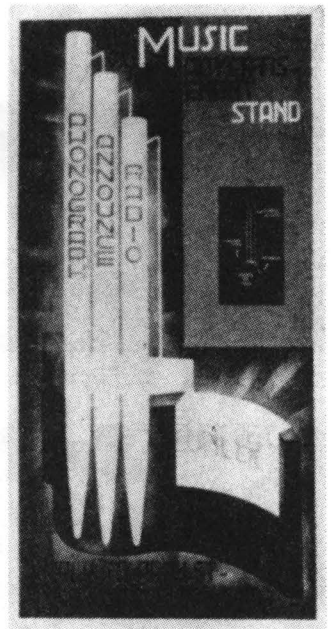
工芸科図案部卒業制作 小池岩太郎「海水浴場施設計画」(『校友会会報』第5号より転載)



島田佳矣・千頭庸哉先生謝恩会記念  
昭和10年3月 於上野永藤 (小池タカ氏提供)

哉が同三十四年の採用で、ともに勤続三十年を越えようとしていた。大正八年に今和次郎と齋藤佳三を講師に起用し、同十一年には森田武を助教授とし、羽野禎三を助手に採用するなど、人事刷新の試みもなされたが、首脳部に変動がなかったためか、その教育内容はともすれば時代の進展に





同 末田利一「明日の広告宣伝一提案」  
(同前)

遅れがちとなり、既述(307頁)の齋藤佳三の意見書が示すように、教育改革の声も上がるようになった。

こうした状況に鑑みて、和田校長は人事刷新を決断し、校長就任早々、七月二十六日に広川松五郎を助教授に起用、次いで同月三十日に島田佳矣を、八月十三日に千頭庸哉を解任。十月三十一日に和田三造を教授に起用。翌八年三月三十一日に今和次郎と齋藤佳三を、また、五月二十二日に図案科と密接な関係のあった工芸部日本画授業担任教授渡辺香涯を解任し、次のような図案科実習指導陣を

作った。

主任	教授	和田	三造	図案実習担任
理事	助教授	広川	松五郎	図案法、図案実習担任
同	同	森田	武	図案実習担任
講師	同	羽野	禎三	同
助教授(兼任)	高村	豊周	工芸製作法担任	
教授(同)	小泉	勝爾	絵画実習(日本画)担任	
助教授(同)	山田	廉	同	

同 (同) 伊原宇三郎 絵画実習(木炭画)担任  
教授(同) 建島弥一郎 塑造実習担任

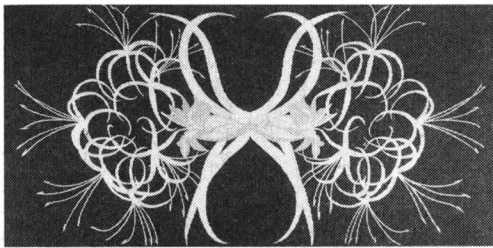
昭和八年十月三十一日以後沼田一雅、加藤  
顕清に変更

講師(同) 金沢 庸治 用器画法担任

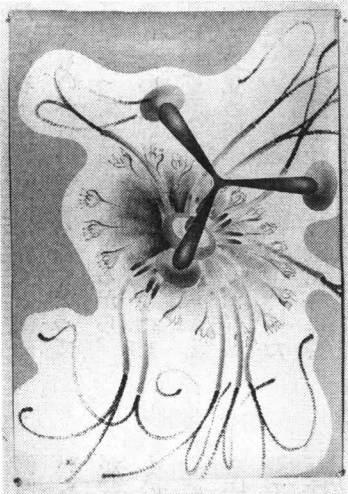
図案科の主な実習科目は上記教官指導による図案実習、絵画実習、工芸製作法で、外に必修科目として修身、東洋工芸史、西洋工芸史、英語または仏語、体操があった。また、図案科と建築科以外の各科課程表には選択学科(十五科目中より選ぶ)が設けられていたが、図案科生徒も受講できることになっていた。

和田 三造

図案科主任となった和田三造は明治十六年兵庫県に生まれ、十三



解体組織習作 昭和15年第1年級課題  
(三好二郎氏作・提供)



同  
(同)



森田武と図案部1年生たち  
(中林敏夫氏提供)

歳のとき福岡県に移住し、県立中学修猷館中退後、本校西洋画科に入学、明治三十七年に卒業した。同四十年の第一回文展に「南風」を、翌年の第二回文展に「焔燻」を出品してともに最高賞を獲得したため、同四十二年に文部省よりフランス留学を命ぜられ、大正四年に帰国。その後、文展、帝展審査委員をつとめ、昭和二年帝国美術院会員となった。油画制作の外に図案や染織、日本画を研究し、染色芸術研究所(大正九年)、日本標準色協会(昭和二年)を設立。しばしば外国へ出掛け、献上画や戦争記録画の制作にも積極的に取り組んだ。

画家として華やかな脚光を浴びて出発した和田であったが、中年以降、彼が最も大きく世に貢献したのはデザイン、工芸振興の分野においてであって、その活動は自宅(赤坂福吉町)に隣接する図案

研究工房と日本標準色協会を拠点として展開された。なぜ仕事の重心をデザイン、工芸に置いたかという点について、本校教授に就任したばかりの和田に生徒が質問したところ、「世の中は需要と供給の関係を忘れてはならない。絵をかくものが買い手より多くなつては困る。反対に図案はこれから必要になってくるものであるから、そういう時代に合うように自分はやりたい。」と答えたという（『東京美術学校の歴史』所載乗松巖談）。和田には資本主義の発達と直結したデザインの発展ということに関する先見の明があったようだ。業界、政界、軍部との結びつきがあったため、種々の依頼を受けたが、自分はディレクターとして指揮して実際の仕事は後輩たちに委ねることが多かったようである。

和田は学外における仕事が多く、生徒に親しく接する機会は少なかったが、科の指導者として信望があった。それは恐らく視野の広い芸術家であったためだろう。左記の文にもそうした特質が現れている。

美術教育といふことに就ては、私は今までに餘り考へなかつた他の部面の問題（これからは充分に考へて見たいと思ふが）であるので、平生の感情もなく、系統的な考案ももつてゐないので早速に述べることが出来ない。だからごく手近な雑感を述べやう。〔中略〕

繪を描く人が、書物を讀むこともよく、思索的な勉強をすることも私は悪いことではない——寧ろいふことだと思ふが、それよりも畫家としてはもつと大きな使命があるものではなからう

か。美を認識し、見分け、味ふことが第一義であらねばならぬ。第一流の骨董屋が、小僧を仕立て、美術品を鑑別するに當つて、如何なる場合にもいふものだけ、筋の通つたものだけを見せて、悪いもの、偽物といつたものを決して見させないといふ話をきいたが、妥當な遣り方であると思ふ。美の鑑別や味到は、決して悪いものを見せる必要がないのだ。いふものさへ見せておけば、悪いものも分つて来る。これは非常に贅澤な教育法であつて、その話を聞いて一驚したことだが、美術教育、畫家養成にもこの點が必要である。本當にいふ繪のもつてゐるものは共通である。單に繪だけではない。彫刻にしても美術工藝品にしても身邊の木工品の末に到るまで、美の要素、いふと思はれる味ひは共通してゐる。美の認識といふものには、ある一定の標準がなければならぬ。

出來たての、手にとげのたつやうな僅かの時間しか經ない民藝品よりも、何十年何百年の空氣にふれた、古い時代に作られた工藝品には共通のものが含蓄されている。

私なども家の子弟連には出來得るだけの機會に、古いものを觀させ、骨董的な展覽會を缺かしたことがない。少くも今日まで由來され、宣傳された古美術には必ずいふ要素（時偶にはつまらないものもないではないが）がなければならぬ。反對の意味に於ていふものはまた將來にまで保存されなければならぬものではあるまいか。これらの古美術品によつてどこが美と感ぜられ、いふと認識されるかを識るべきであらう。由來を尊び、銘柄を重じて今日喧しく傳へられてゐる單に工藥美術品（芸）だけについていふのではない。純正美術——繪畫彫刻の上にも同様のことが言はるべきで

ある。古美術の鑑識こそ今後の美術家には緊要なことであらねばならない。一つの心懸けとして必要な機關であると思ふ。

私が學生時代に故岩村透先生を訪ねた。先生は私に、ギリシア、ロオマの古錢と十八九世紀頃のドイツのメタルとを見せて、その藝術的價值を試問されたことがあつた。率直にギリシア、ロオマの古錢をいゝといひたかつたのだが、鑑賞の不徹底な不安からか、新しいドイツのメタルをいゝといつた。先生は言下に駄目だ、駄目だといはれて「古錢の方が面白いと思へるまでに繪を勉強しなけ「れ」ばいけないよ。」と親切に教へて下さつた。今日時折思ひ出してはいゝ教訓だつたと感じてゐる。そこに氣着いてかどうだつたか、東京美術學校では、昨年あたりから帝國美術院附屬の研究所や、美術學校に古美術、古物品を陳列して、それを解説し、批判する催しが始められたが、私はまことに喜ばしい計畫であると思ふ。大に古美術を研究して、將來の日本の美術が大成されんことは希望に堪えない。

〔美術教育雜感〕『美術新論』第八卷第三号、昭和八年三月

和田の起用は図案科の教育内容に不満を抱いていた生徒たちに歓迎されたようだ。小池岩太郎は當時を回想して次のように記している。

和田三造先生の思い出

小池岩太郎

和田三造先生が東京美術學校に見えたのは私が三年生の時であつた。図案科主任教授としてである。

三年生といえ、ようやく図案家として、今でいうデザイナーとしての自覚もついてくるが、同時に当時の図案課題や評価に対しても又何かと疑問や不満を持つようになっていく頃であつた。

その頃、私たちの制作は、病院の回診よろしく先生方が揃って見てまわり、講評・診断されるのが例であつた。忘れもしないが先生が着任された時、課題はステンドグラスのデザインにかかつており、私は瘦せこけた嬰兒に鳩が祝福を与えている図を描いていた。重い色調で、今までではとても背いていただけそうもない作品であつたが、先生は忽ち足を留めて、このまま続けるように、と励ましをいただいた。私はむしろ新鮮な驚きを覚え、先生が登校されるようになったことに夜の明ける思いをいだいたものであつた。そういえば、現在博多在住の畏友柏崎榮助君、彼は入学以来、それは僅かな色味を添えた程度で殆どは白色かと思える色調の作品で終始していた。例えば真白い緞帳に胡粉を盛り上げた白い牛が描かれていたりするのである。そんな柏崎をいち早く認めて力づけていったのも和田先生ではなかつたか。

そんな風だつたから、學生各々が、自分たちの夢を先生に託すということも大きかつたようである。当時私たちの教室は二階にあつたが、先生の出校日には誰れかが下を気にして、先生の登校を見つけると、来たよと合図をする。皆いっせいに窓辺に寄つて、先生がステッキをついて下を通り抜け玄関に入るまでを見つめるのである。

ステッキは藤だつたと思う。温顔で目は涼しく、むしろかわいかつたが、口元を引きしめて、キラリと光る厳しい顔もあつた。

一方柔道で鍛えたとも聞く体軀と、人柄から匂う全容は威風あたりを払うものがあって、我が師ながら頼母しかった。「小池君、男の服装はね、上着はどうでも、ずぼんをびんとはきおさめることが大切だよ」と言われたことを覚えてる。ダンディで和田三造という様を為していた。どうでも、という上着はホームスパンの印象が強い。煉瓦色のその一着は私の手元にあり、胸もとの似ている息子、太三が時折着用に及んでいる。

先生は又よく一流のレストランに呼んで下さった。貧乏学生だった私などにはとても出られる場所では無かったが、こういう処もあるんだよ、とデザイン学生の生活体験に加えられたのである。麻布のフランス料理、龍土軒のうまさ、瀟洒なたたずまいは忘れられない。

先生から、おしゃれの楽しさと、ぜいたくの美德を教わったことは、以来私のデザインや、それなりの生活ぶりに、大きなプラスとなって働いている。

又やがて、帰っていくよ、の声で同様窓辺から校門の外へと見送るのである。畏敬でもあり、憧憬でもあり、或いは又一人物の鑑賞であったかも知れない。然しそれだけで学生たちは十分に刺激を受け、内面の昇華につながるものがあった。

教師というものは、その人物が入ってきただけで、或いはそこに居るだけで、学生たちに充実感を覚えさせ、やる気を起させるものでなければならぬ、と思っっているが、和田先生の美術図案科での存在はそのようなものであった。現に私なども、そのような教師でありたいと念じてきたが、とても及びもつかぬことであ

った。

当時、美術学校は五年制であったので、私はそれからの二ヶ年半、大切な時間を先生の学生として過したことは本当に有難いことであった。

〔和田三造展〕昭和五十四年、北九州市立美術館。数字は漢数字に改めた。

#### 広川松五郎

広川松五郎は明治二十二年新潟県三条町（現在三条市）の木綿の織元の五男として生まれた。彼は詩、文学、図案をよくした二番目の兄（明治三十八年戦死）を最も尊敬し、影響を受けた。後に図案家となり歌人ともなるのはこのような家庭環境によるところが大きいと言われる。はじめ洋画家を志したが、家族に反対され、比較的就職率もよく、家業とも関係のある本校図案科に入學。斎藤佳三とは同期で、ともに島田佳矣の教育方針を時代感覚を欠いた古めかしいものだとして反発した。在校中に与謝野鉄幹に入門し、同門の高村豊周（大正四年鑄造科卒）と意気投合。ともに文芸活動や新興工芸運動に情熱を注いだ。

大正二年、本校卒業後は主に出版物の装丁などによって生計を立て、同十二、三年頃から染織作家の道を進み、昭和四年、第十回帝展において特選を獲得。翌五年無鑑査となり、官展における新感覚派の染織作家として着実な活動が始まり、当時図案科卒業生中最も有望な若手と見なされるに至った。大正十五年からは私立日本美術学校図案科主任教授として図案教育の経験も積んだ。

広川は和田三造よりも生徒に接する機会が多く、そのため図案科では広川の影響の方が強かったとも言われる。——尤も、卒業生の話によれば、常に生徒たちに接して親しく指導したのは森田武だったという——彼はきわめて芸術家的な性格の持ち主で、官展審査等の外はあまり政府関係の事業に携わらず、作家生活に徹していたようである。ただし、工芸界の革新を望む気持ちは人一倍強く、しばしば工芸界の現状を痛烈に批判した。例えば帝展初入選の年に執筆した「工房余談、専門病」(『美の国』第三卷第一号、昭和二年一月)のなかでは、「さて考へて見るに工芸美術界は、漆工家は漆工家同志、金工家は金工家同志、各々其専門ゆえに毒されて来た事まことに久しいものである。技巧が型に嵌る事、仕上げが完璧である事が金科玉条であつた。論ずる者はひたすら既往様式に抛り、技葉の技巧に拘泥した」とし、その結果、作因に退屈と行き詰まりをもたらし、専門家たちの専門的自負心や職業的蘊蓄の倨傲さが、すべてに敬虔な若い作家を蹂躪していると批判した上で、このような「専門病」に冒されず、新たに現代生活と形質ともに即応する工芸を開発するためには、素人なるがゆえの新鮮な発想法こそ最も大事にすべきであると主張している。本校の図案科の指導にあたっては、彼はこの新鮮な発想ということを重んじた。

前出図案科指導陣表における広川の担当科目「図案法」は「図案原理」と題が変えられた。その概要を三好二郎氏受講ノート(昭和十五年度)によって左に記す。

四・一八<sup>日</sup> 序論、美術の分類

純正美術と装飾美術	五・二
参考図書(洋書)、装飾美術の始まり、工業・工芸・美術の区分	九
本論、造型美術の要素(美的要素、実用的要素)	
装飾美術の定義  衣食住に則して人間生活の福利を増進せんとする各種の目的ある美術	
装飾美術の区分(工芸美術と生活美術)	
図案の定義  生活美術全般に互つてその製作に直面して沸き起こる作者の下心(案、design)である。	
画因(モチーフ)の道、図案におけるモチーフの意味と重要性	二二
画因の種類、無機的画因と有機的(自然)画因	
有機的画因における解体組織、典型的な文様の例	
図案の基礎、立体図法(紙上、模型)	六・六
同、散点式、器物形態の種々相	一三
図案の歴史的様式(古代エジプト)初期キリスト教スタイル)	七・四
同(ビザンチン様式)サラセン様式)	九・一二
美的要素、第一色調、第二分量、第三形、第四節奏	一七
同、構成	一〇・三
同、第五構成(構想、構図)、第六変化、第七単純性、第八安定感	三一
第九充実	一一・七
素材の美とその理解(木材工芸品)	一四



- 二一 同(布帛工芸)
- 二八 同(同、染織)
- 一・一六 同(同、同)、同(鑄金、鍛金)
- 三〇 同(彫金、印刷製品)
- 二・六 同(版画道具、西洋木版とエッチング)
- 一三 同(窯芸)

教育内容の変化

和田三造は教授に就任するや生徒たちの持っていた不満や希望を聞き、その上で在野的な立場から次々と新しい課題を出して時代に即応した図案教育を行なおうとした。生徒も対現代社会との関係を自覚して活気づいたが、その活気にはデザイナーを必要とし始めていた当時の産業界の情勢も反映されていた。生徒たちにとって何よりも画期的であったのは、教官の折々の講話や作品評価であり、それらが実際の制作に裏付けられたものであったということである。生徒は日常展覧会その他で教官の作品を見ることができ、それが教室で講話を聞く時の具体的な証となり説得力を持った。卒業制作にはこうした変化が端的に現れており、従来傾向——古典を応用した装飾絵画的図案を工芸品に適用して描いたものを主とする——から現代生活デザインの表現という傾向への進展が見られる。

改革による教育内容の変化は、上述のように図案実習の課題の上にはっきりと現われている。先ずその変化を示すために、四年生るとき改革に遭遇した秋山光喬氏の提供資料による課題一覧表(一)を掲げ、次に改革後の新傾向と更なる変化を示すために、小池岩太郎

氏の手を経て本学芸術資料館に寄贈された「東京美術学校図案科課題 昭和十年より昭和廿五年まで」から昭和十、十五、十八、二十一年の四カ年分(一)を抜粋して掲げる(一)は課題名が明記されていない作品。

(一)

○二年生(主任 島田佳矣)

祝儀用帛紗図案

硯箱図案

堆朱卓図案

松屋ポスター

HANDBACK PARASOL

金属製宝石箱図案

銀製打出茶托

〔衝立 鹿の絵〕

○三年生(主任 同前)

桜花図蒔絵重箱

蝶図蒔絵文箱

網干文様漆器組盆

〔中国風壺陶器図案〕

〔中国風花瓶陶器図案〕

〔星の図案〕

陶器製菓子器図案

○四年生(主任 同前)

舞台用裾模様図案

DESIGN FOR TABLE-CLOTH

○四年生(主任 和田三造)

- DESIGNS FOR CHANDELIER AND BRACKET
- DESIGN FOR SILVER WARE
- DESIGN FOR CUSHION & TABLE CENTER
- DESIGN FOR CABINET

PLAN OF ELECTROLIER

DESIGN FOR STAINED GLASS

DESIGN FOR THE FURNITURE AT SALON

婦人室向絨氈図案(四分の一)

暖炉裝飾用置時計燭台図案

(二) 昭和十年

第三學期〔昭和九年度〕 圖案課題

第一年級

課題

冬向シヨール

商品包紙

ブック・エンド

第二年級

課題

ハンド・バック

ステンド・グラス

家庭用ラヂオ機

第三年級

課題

寫真アルバム表紙

資料素材

染、刺繡 和服用

文具店用寫眞器店用各一種、記入文字(店名、所、電話、マーク)

鑄金又ハ燒物 資料、鳥又ハ獸 二對

寸法

丈鯨二尺 巾同一尺

八寸乃至二尺  
二尺一寸×一尺七寸  
五分單色濃淡

原寸

用紙

提出日

一月廿六日正午

二月 九日同

二月十七日同

資料素材

二種 様式並ニ素材任意

劇場喫煙室用 資料、風景

主材 木材

寸法

原寸

六尺  
二尺  
縮尺三  
分ノ一

原寸

用紙

提出日

一月十二日正午

一月十九日同

二月十七日同

資料素材

皮細工又ハ織物 表面ノミ一種

寸法

縦八寸七分横一尺二  
寸五分

用紙

提出日

一月十二日正午



壁面大時計  
ネオン廣告

第四年級

課題

卒業制作

公會堂ハ近代劇場内部用、素材任意  
假定場所 未定

原寸ノ約二分ノ一大

一月十九日同  
二月十七日同

二月末日採点

昭和十年一月八日 工藝科圖案部教官

第一學期圖案課題

第一年級

課題

裝飾文字

浴衣

繪日傘

裝幀

模様配置研究

第二年級

課題

ポスター

喫煙具

木製活動玩具

資料素材

THE DECORATIVE ARTS

自然と人生 各五種

婦人向 二種

婦人向 二種

四六和紙木版小説  
菊クローズ 國語辭典

見返扉函

與へられたる盆

資料素材

日本郵船世界航路

卓金具用  
漆金具

鳥獸人物 五種

寸法

任意

由三十四センチ  
長四十六センチ

縮尺

四六縱六寸三分横四  
寸二分

菊クローズ 七寸二分五分

用紙

寸法

四六全紙(三尺五寸  
二尺五寸)

原寸

原寸

用紙

記入文字

一 AROUND THE  
WORLD EASTWA-  
RD OR  
WESTWARD WITH  
LINE  
一、會社名略号、マーク、

提出日

五月 四日正午

五月十一日

六月 八日

六月十五日

六月廿九日

提出日

五月十八日正午

五月廿五日

六月 一日

菓子化粧箱

海 水 着

模型ブックエンド

第三年級

課題

古典寫生（関西旅行者ヲ除ク）

模型、卓上燈具

繪 皿

ラヂエーター

ウキンドウ裝飾

帶 地

第四年級

課題

AB選擇任意

A、博覽會中央廣場塔設計

B、婦人服飾品

円型、角型各一種

ドレス、パジャマ、帽子、靴

假想材料（粘土）

資料素材

假想材料（ブリキ、木、紙等）

日本新古典式陶器 五種

金屬製品

夏向帽子とステッキ（夜間照明装置）

染刺繡片側帶

円 直三十一センチ  
高七センチ  
角 縦三十四横二十七  
高九センチ

原寸  
見取図（縮尺）

寸法

任意

直九寸

二分ノ一大

間口二間半  
奥行六尺  
高サ九尺

巾三十四センチ

用紙

六月十五日〃

六月廿二日〃

六月廿九日〃

提出日

四月廿日正午

四月二十二日ヨリ始メ  
六月一日正午提出

六月八日正午

六月十五日〃

六月廿二日〃

六月廿九日〃

提出日

六月廿九日正午

（採点 卒業製作成績加算）

一、塔は博覽會全貌の廣告的使命を帯ふる如き高層なるを要せず第一會場の中央部、各館に圍繞されたる庭園の裝飾的主体となるべき事、

一、塔は夜間照明並に噴水を俱備し花壇並に通路を共案すべし（假定 Plan 別載）  
廣場ノ面積一町三町  
塔ノ面積三間四方位

一、年齢は既婚二十三歳より三十五歳までとす  
一、劇場競馬場其他社交的和式外出装にして現代の先驅を示唆すべき指導精神に本づく考察たるべし  
一、秋冬向

第二學期圖案課題

第一年級

課題

樂譜表紙裝幀

立体構成

模 寫

クツシヨン、座蒲團

草花を主題とする新唐草模様

指環、帶止、ヘヤピン

新聞廣告

花 瓶

第二年級

課題

雜誌スポーツニュース表紙

劇場觀覽席入口ドア

模型 置時計

一、主要種目

- (イ) 女裝全体見取圖
  - (ロ) 着物
  - (ハ) 帶
  - (ニ) 羽織
  - (ホ) 半襟と帶止
  - (ヘ) 草履ハンドバック
  - (ト) パラソル、頭裝
- 但し考案により右の全種目を必要とせざるも可、又は加ふるも可也

昭和十年四月十一日 工藝科圖案部教官

資料素材

表裏一種

純粹美の表現

日本

各表一種宛 染、刺繡、織物

純創作模様

各三種宛 素材任意

石鹼  
藥  
スキー店  
洋樂店

陶磁器一種

資料素材

寫真應用、二種 二色刷

主要材料 木材

假想材料 (ブリキ、紙、木等)

寸法

四六倍 (八寸五寸  
六寸二分)

既定材料

クツシヨン一尺五寸角  
座蒲團二尺角

原寸

純一尺四寸横一尺二寸七分  
三寸九分  
一尺四寸七  
一尺六寸八分 六寸三分

小判画用紙

提出日

九月 十四日

十月 五日

同 十二日

十一月 十六日

同 二十三日

同 三十日

十二月 七日

同 十四日

提出日

九月 十四日

同 二十一日

同 二十八日

模 魚介を主題とせる新唐草模 様 ポスター 優勝旗(幡) 花盛器	支那又ハペルシヤ 純創作模様 帝國航空輸送會社用 石版又ハオフセット 五色以内 全日本学生水上競技大會用、織物、 刺繡其他 主材 金工	小判画用紙 四六全(三尺五寸) 紙(二尺五寸) 原寸 原寸	十月 五日 同 十二日 十一月 三十日 十二月 七日 同 十四日
第三年級 課題 百貨店食堂ガールユニフォーム 模型 庭園の噴水 模 寫 小供室家具セット 鳥獸を主題とせる新唐草模 様 上流住宅應接室シャンデリ ヤ 近代的小劇場緞帳 洋風小住宅門並塀 第四年級 課題	資料素材 假想材料(ブリキ、木、紙、粘土等) ゴシック又ハルネサンス 書架、テーブル、椅子 純創作模様 正面図 側面図 平面図細部 主要材料 金工 織物、アップリケ、刺繡 門より正面玄関迄に約百坪の花壇あり	寸法 見取図(正背二面) 五分ノ一 小判画用紙 應接室三間、二間半 縦三十尺十分ノ一 横三十尺十分ノ一 五分ノ一	提出日 九月 十四日 同 二十一日 同 二十八日 十月 二十六日 十一月 二日 同 九日 同 十六日 同 二十三日
卒業制作		下図提出 九月中	

(三) 昭和十五年  
第三學期圖案課題

昭和十年九月十一日 工藝科圖案部教官

第一年級

課題

陶器花瓶

絨 氈

婦人手袋

第二年級

課題

壁 掛

照 明 器

漆器風爐先屏風

競 技

第三年級

課題

專攻製作

同

同

第四年級

課題

卒業製作

資料素材

日本室 床の間用 資料 花鳥

鐘紡風の絹絨氈  
資料 猫又は虎、豹等の動物

五種 任意

資料素材

綴織 資料 風景

ホテル食堂用、天井四隅四個の内一個  
上部は天井に密着し二面(又は一面)底面  
共に採光し金属による透し彫とす  
裏面畧す 資料任意

寸法

原 寸

六尺、九尺、縮尺

原 寸

寸法

任 意

縮 尺

提出日

一月 三十日前九時

二月 六日〃

二月 十三日〃

提出日

一月 十六日前九時

一月 三十日〃

二月 十三日〃

二月 二十日〃

提出日

一月 十六日前九

一月 二十三日〃

二月 二十日〃

提出日

三月 一日午前十時採点

昭和十五年一月 工藝科圖案部教官室

第一學期圖案課題

第一年級

課題

解体組織

裝飾文字及イニシヤル

幾何學形態演習

立体構成

學校文庫に就き我國古典(徳川期まで)に現はれたる雲と水の種々なる様式を蒐集し提出す  
べし 線條にて表現色彩を使用せず

創作圖案

第二年級

課題

ポスター

菓子化粧管

海水着セット(婦人用)

木工玩具

競技

第三年級

課題

ウインドー裝飾

帽子函

競技

資料素材

植物發芽態觀察 五種

(C)(B)(A) Department Stores  
知性の貧困  
イニシヤルは各自姓名のキ 各五種  
ヤピタルレター

(SOD)を基本とし二色配合による幾何  
學形態の美的構成

假想材料(粘土)

火焰及煙

資料素材

産業戰士(工場従業員)の健康保全を強調する  
標語を創り且厚生省の三字記入

紙器洋風菓子入二種

海水着、帽子、履物

ラッカー仕上げ 五種  
年齢の考慮を要す

工藝品(裝身具家具調度一般)

資料素材

夏のスポーツ用品實施  
技

婦人帽、子供帽等の賣店用包裝函各一種実寸

関西旅行に得たる古典美術の感銘を基調とせる  
工藝品の創作一種

寸法

用紙  
画學紙

同

(イ)適合円五種  
(ロ)適合と考慮せざる  
もの五種

同

薄美濃糝水引  
画學紙

寸法

四六半截  
二尺五寸×一尺八寸

同

同

同

自由

寸法

用紙  
画學紙

同

自由

提出日

四月二十九日正午

六月 三日正午

六月 十日正午

六月二十四日正午

七月 一日正午  
七月 六日正午

提出日

四月二十二日正午

四月二十九日正午

六月 三日正午

六月 十日正午

七月 六日正午

提出日

五月 二十日正午

七月 一日正午

七月 六日正午

第四年級

コンクールを廢し選擇課題とす 左のA、B、C三種中の一種を選  
び一學期を通じ五点を逐次毎週月曜日に提出する事 且し一課題二  
週間以内に提出する事(採点 卒業製作成績加算)

課題

A 室内裝飾各機構

一、カーテンボックス並にカーテン

一、絨氈

一、陶片<sup>パネル</sup>嵌入額三尺×二尺五寸据付場所ストロップ上部壁面

一、燈具 (イ)床上電燈 (ロ)壁面持送り燈具 (ハ)卓上電燈 (ニ)

燭台(二本立以上ノモノ)

一、ストロップ前立一面或は二曲とし漆藝、皮工品、鑄、鍛、彫

金等

一、矩形テーブルラナー並にクッション

一、硝子酒器並にリキウルセットボックス(木工)

一、花器、鑄、陶磁、漆、<sup>プラスチック</sup>人造可塑物製品

第二學期圖案課題

◎印は一品製作の高級品をめざすものに非ず 生産工藝のサンプル(見本)とし多量に製作し、良きもの美しくしきものをよ  
り多くの隣人に與へむとする熱烈なる指導精神を以て作に直面すべし。

第一年級

課題

二種の植物を畫因として左右均  
齊式構成を訓練せよ

資料素材

用途を考慮せず 三色濃淡

寸法

期間及提出  
九月二十三日

一、茶<sup>テーブル</sup>卓 移動可能

一、壁面鏡

一、雜誌新聞ホルダー、木竹工

一、葉巻入、金具を裝飾としたるもの

一、喫煙具セット

一、ラヂオセット

一、サービス盆

一、置時計

B 服飾綜合製作

一、歐風組物 着物、帽子、杓、ハンドバッグ

一、和風組物 着物、帶、履物

C 室内裝飾用裂地<sup>パターン</sup> 柄 主として椅子張又はカーテン、織物、一  
枚に二種を描く事

以上

以上

昭和十五年四月十五日 工藝科圖案部教官

◎ガラスの鉢

與へられたる畫因を觀察し之を任意の工藝美術品のモチーフとせよ

近代化學辞典 表紙

◎前掛

模 寫

裸体(男)のポスター的表現

◎竹製・小工藝品

第二年級

課題

『山岳』のポスター的表現

◎手提

ポスター

◎暖簾

◎陶製喫煙具セット

ノッカー

◎婦人向ハンカチーフ五種

競 技

第三年級

課題

◎旅行用トランク

二種、見本提示

※※※ (全体或は部分)

表紙並に扉(単色輪廓) クロース、商工省化  
学局發行。

若き女性の炊事用として形と柄との快調  
各種布帛類の更生にてアブリケ加工の事

陳列館、本校所蔵アッシュリア彫刻裝飾

別掲泰西古画による、一面三種の事 力、動、  
立体感等の種々相を單(端)的に表現する訓練

五種。竹材の質を研究し極めてありふれたる用  
に即して五種を自選し之に活かせ。

資料素材

氣象の變幻、巨高性、陰影、形態美、裝美、雄  
大幽邃等の情趣を表現する訓練。一面、三種  
主婦買出し用。蔬菓、食料品等を入れるもの。  
材料、竹藤蔓類の編、組物。軽く強く美しく。  
改札口、駐車場等の市内交通道德の強調  
標語例○一列敏速○そろ／＼急げ

加工は木綿に糊置染。和風中流住宅、玄関より  
奥へ通する所に間仕切りの用を兼ね。

市販に陶製にして快適の品を見ざる久し  
吾等凶案学生の存在理由。

中流洋風住宅(主人貿易商三十三才)の玄関扉  
横に位置する訪問客用呼鈴。鍍金又は鑄物。二  
種

加工捺染、ドロンウォーク、刺繡、レース等輸  
出仕向地北米地方

資料素材

統制品皮革を最小限度に用ひ主体を代用品(新  
興材料)とす。強靱、堅牢と使用慾横溢の美と。

原寸

菊倍版(七寸五分、一尺)

背二寸

原寸

原寸

寸法

寸法任意  
各自印刷物寫眞の蒐集より取材する  
こと

原寸

四六半截(二尺三寸、一尺六寸五分  
の大き)オフセット印刷三度刷

横四尺 縦五尺 適宜に縮  
尺日本趣味、回顧趣味的  
気品と落つき

原寸

寸法原寸  
発音装置考案或は電流による

原寸



十月 七日

同 十四日

同 廿八日

十一月 四日

十二月 九日

同 十六日

同 廿三日

期間及提出

九月 三十日

十月 七日

十一月 四日

同 廿五日

十二月 二日

同 九日

同 十六日

同 廿三日

期間及提出

十月 十四日



◎折疊式家具

忠靈塔部分パネル

建築製圖

建築製圖

建築製圖

競技

第四年級

課題

卒業製作

木工、竹工、金屬塗料。質感、機構、硬柔彈力、輕便(運送)の綜合研究。机、椅子(小椅子、長椅子)紋様風、薄肉彫刻。忠靈塔別掲

縮尺

同 廿一日

十一月 十一日

同 十六日

同 廿五日

同 三十日

十二月 九日

同 十四日

十二月 廿三日

下圖ノ提出

十月 十日迄

昭和十五年九月 工藝科圖案部教官室

四 昭和十八年

第一學期圖案課題

第一年級

古典研究(東洋染織)時代裂紋様模寫

一人二種(展示三種ノ内、任意二種撰擇)原寸大

自第二週 提出期限 四月廿四日正午

至第三週

第二年級 古典研究(日本奈良朝期)正倉院御物模寫

一人三種 適宜拡大模寫ノコト

自第二週 提出期限 五月八日正午

至第五週

第四年級 卒業制作

昭和十八年四月十日 圖案部教官室

第一年級、第六週圖案課題

一、植物生態ノ圖案表現

藤、木蓮、躑躅、桐、蒲公英、杜若、罌粟、牡丹

右ノ内三種撰擇

提出期限 五月十五日正午

第四年級、卒業製作經過提示

一、卒業製作企劃報告書提出 五月廿日午前中

一、同 右 クロッキ提示 六月十一日午前九時

一、同 右 本下図 提示 七月九日午前九時

必ズ以上三次ノ提示ハ嚴守ノコト

昭和十八年五月 図案部教官室

第一、二、三年級次週（一、三年級ハ第七週、二年級ハ第八週）

図案課題

一、南方共榮圈ニ於ケル廣告塔、廣告板ニ施スベキ宣傳宣撫図案。  
趣旨

南方共榮圈各地ニハ、市町村ヲ通ジ、幾多ノ残存セル敵国商品ノ廣告塔、廣告板ガ漸時我ガ方ノ宣傳、宣撫用トシテ、ポスターニ寫眞宣傳ニ使用サレントシテキルガ、現地ニハ特ニ図案家手薄ノタメソノ多クハ白色ニ塗リ潰サレシママ放置サレテキルカ或ハ原住民看板職ニヨル拙劣ナル図案ガ描カレテキルニ過ギス現狀デア  
ル

此ノ廣告板、廣告塔ヲ利用シ、快的ニシテ効果的ナル図案ヲ布置シ以テ宣傳、宣撫ニ供シ、銃後美術學生ノ眞摯ナル情熱ト感激トヲ以テ大東亜共榮樂土大建設ノ一端ヲ擔ハントス。

(一)目的 廣告塔、廣告板利用ニヨル宣傳、宣撫

(一)内容 イ、大東亜民族ヲ團結セヨ、

ロ、樂土大東亜、

ハ、日本軍ト協力セヨ、

ニ、同生共死ノ同朋ヨ、

ホ、働クカラ勝ツノダ、

ヘ、鬼蓄ノ米英

等ノ内容ヲ色調明快、構図ハ單純ニアクマデ力強キ表現

様式タルコト（寫眞参照）

(一)四・六版全紙（三尺五寸・二尺五寸）

縦・横任意、色彩任意

(一)提出期限 各週末正午（一、三年級五月廿二日）  
二年級五月廿九日

昭和十八年五月十五日 図案部教官室

第一年級十週圖案課題

魚類生態ノ圖案表現（金魚三種）（於上野動物園）

提出 六月十二日（土曜）正午

第四年級

卒業製作素描提示 六月十一日午前九時

昭和十八年六月二日 圖案部教官室

第二年級次週（第九週）課題  
第十週

一、古典紋様模寫

・大和室生寺金堂内本尊釈迦如来光背（部分）

・大和室生寺金堂内地藏菩薩光背（部分）

右ノ内一ヲ撰ビ、別ニ示ス部分ノ実大、着色、丹念ナル模寫ヲ

ナスベシ、

提出期限 六月十二日正午

昭和十八年五月廿九日 圖案部教官室

第十一週圖案課題

一年級

軍鶏を主題とするクツシヨン圖案

表裏（綴織） 樞軸國使臣に贈るべく豪華にして且東洋的なる  
事 金銀糸使用任意。表を重く裏を軽く 寸法尺五寸角或は圓  
形 提出六月十九日正午

三年級

電気スタンド實測事、側、断面圖又ハ展開圖による忠實正確なる  
材質感及説明記入

提出 六月十九日正午

圖案部教官室

第一年級圖案課題

自第十四週至第十六週

色彩研究（第十四週）

A 自然物 1 七月ノ花壇 2 都市俯瞰 3 貝類

B 意識的構成—創作

以上 A B の各三種を経緯（タテヨリ）により表現

提出 七月十日正午

水面投影形象（第十五週）

三種獨立表現

提出 七月十七日正午

音感表現（第十六週）

A 飛行機ノ爆音 進軍喇叭中隊市中行軍（梵音）

B 松籟 遠雷 溪流 雲雀

以上 A B より各二種を選定表現

提出 七月二十四日正午

第二年級圖案課題

自第十四週至第十五週

競技

提出 七月十七日正午

第三年級圖案課題

自第十三週至第十四週

競技

提出 七月十日正午

昭和十八年六月 圖案部教官室

以上

二學期、第一、二週圖案課題

第一年級

校内銅像實測製図

像並ニ台座、正、平、側面図及ビ見取図、縮図淡彩着色

各細部寸法明示

第二年級

買物籠二種

藤、アケビ類ノ蔓製編組品、実寸

第三年級

擬裝

イ、帝室博物館本館 口、帝國図書館 ハ、本校文庫（含、閱

覽室） ニ、本校正木記念館（含、陳列館） 鳥瞰図示

昭和十八年九月一日 圖案部教官室

一年第三週課題

犠牲猛獸供養塔 提出期限九月十八日正午

今回萬一ニ備へ處理シタル上野動物園ノ猛獸ヲ供養記念ノ爲同動物園ノ構内正面入口近クニ建設スベキモノ。

礎階面積九尺平方、主材―自然石、大谷石、花崗岩、セメントノ類、

要、正側平面、並ビニ見取図、寸法(曲尺)明示ノコト

## 二年、第三、四週課題

省線電車内、網柵支持金具、及ビ吊革、吊手、同支持金具ノ代替品 提出期限九月廿五日正午

代替材料―木、竹、並ソノ合板

右ハ代用品協會ヨリノ委嘱図案ニシテ、優秀ナルモノハ試作ノ豫定

## 三年、第三、四週課題

寺院建築ノ料形肘木ヲ研究シソノ構造美ヲ基調トスル日本國際ホテルノ門扉設計 提出期限九月廿五日正午

昭和十八年九月九日 図案部教官室

## 第六週一年級図案課題

航空機ノ形体研究、(中島ダグラスDC二型 任意選擇)  
(三菱M・C二〇型)

150 (模型ノ1/2) 正面、平面、側面、鉛筆製図、見取図

提出日時十月九日正午(但シ模型ハ九日午前十時ヲモツテ返還スルニツキ承知ノコト)

昭和十八年十月二日 図案部教官室

## 第一年級、第十、十一週図案課題

南方共榮圈向宣傳宣撫ポスター

日本軍トノ協力・團結、増産ニヨル大東亞ノ建設・戦争完遂・

ヲ強調セルモノ 標語ハ原住民ニモ判リ易キモノタルコト 用紙―四六全紙(三尺六寸×二尺六寸)

提出月日―十一月十三日正午

第二、三年級ハ右一年級課題ニ準ジ研究、製作ノ事

昭和十八年十一月一日 図案部教官室

## 第一年級第十二、十三週図案課題

一、南方共榮圈向宣傳宣撫ポスター

趣旨、南方共榮圈各地住民ニ各々左記内容ヲ有スルポスターニテ力強キ呼掛ケヲ行ヒ現地人ヲシテ、大東亞戦争ノ完遂、大東亞共榮樂土ノ建設ニ一層ノ奮起ヲ促サントスルモノニシテ、此レガ実施成果ノ成否ハ実ニ戦争完遂上ノ戰略、並ニ政略ニ影響スル處甚大ナリ

右ハ軍報道部ノ要請課題ニシテ、図案學生ノ擔フベキ責務タリ。眞摯ナル情熱ト感激トヲモツテ此レガ優秀ナルポスターヲ多數ニ現地ニ送達シ聖戰完遂ノ一端ヲ擔ハントス。

内容―イ、勤勞、増産ヲ強調スルモノ

ロ、防諜ヲ教示スルモノ

ハ、内地ノ高度文化ヲ紹介スルモノ

ニ、敵米英ノ没落ヲ示スモノ

ホ、東亞ハ同生共死ナルコトヲ現ハスモノ

色 調―單純明快ナルコト

大キサ―四六全版又ハ規格版、縦横任意

標 語―画面ニ記入ノ場合ハカタカナ、解シ易キ文、讀ミ易キ書体ノコト、記入セザル場合ハ裏面ニ内容ヲ記シ、画面ニ

ハ標語ノ記入セラルベキ余地ヲ考慮シ置クコト

注意—艦船・航空機等ノ兵器ヲ画面ニ用フル際ハ可成精確ナル

形体タルコト

枚 數—一人二枚以上

下図提示—十一月二六日(金)午前

作品提出—十二月四日(土)正午

昭和十八年十一月十三日 図案部教官室

### 第二、三年級

第一年級課題ノ趣旨ヲ体シ、可及的多數ニ且優秀作品ノ提出ヲ望ム

昭和十八年十一月十三日

### 第十六週図案課題

#### 第一年級

月刊雜誌「創意ト工夫」表紙図案三種

一月号 化學兵器特輯

二月号 食糧増産特輯

三月号 生活組織特輯

條件—三度刷以内、寫真モンタージユ可能

記入文字—雜誌名、月号名、及ビ活字体ニテ現ハセル特輯名

大キサ—A列五番縦六寸九分横四寸九分

提出月日 昭和十八年十二月十八日正午

#### 第三年級

競技

提出月日 昭和十八年十二月十八日正午

昭和十八年二月七日 図案部教官室

「特別幹部候補生募集」ポスター募集要項

大キサ 一、壁面用 二尺四寸三分×一尺七寸三分

一、省電用 一尺九寸×一尺三寸八分 } 二種

四度刷以内

記入文字

特別幹部候補生募集、陸軍省、

募集期間 昭和十八年十二月一日ヨリ昭和十九年一月卅一日迄

其他別紙告示参照、航空並ニ船舶關係ノ要員ニ充當ノ旨、或ヒハ

募集年齢等適宜記入ノ事

提出期日 昭和十八年十一月廿日午前十時

右ハ軍報道部ニ於テ本校図案部學生諸氏ニ対シ期待、依頼セラレ

タル緊急要求ポスターニテ凡ソ十六・七才ヨリ廿才迄ノ優秀ナル

少年ヲ多數ニ募集シタキ旨ニアリ、既往ノ陸軍ポスターニ捉ハレ

ズ諸君ノ情熱ニ於テ、年若キ少年ノ奮起ヲ促スニタル明快、力強

キモノヲ製作提出セラレン事ヲ希求ス。

参考展示

寫真十枚(室外持出シ嚴禁) ポスター一枚

追而 優秀作品ニハ報道部長賞(軍刀一振)其他佳作ニハ各々適當

品褒賞致サル。

昭和十八年十一月十五日 図案部教官室

#### 告三年級一同

諸君ハ既ニ、廣范ナル図案活動ノ視野ノ中、將來專ラ攻究セムトス  
ル一ツノ道ノ選擇期ニ到達セルモノト認ム、

依ツテ左記ニ依リ各々ソノ希望ノ選擇部名ヲ口頭ヲモテ當教官室ニ  
申告スベシ、

申告期日―九月末日マデ

第一部―印刷、展示、啓蒙宣傳技術。並ニ其ノ企劃設計図案。

第二部―工藝一般。器機、家具、建築設備等ノ設計図案。

(右ハ今後ノ実習ヲ、ソレニヨリ大別シテ課題ヲ制定シ、各自ノ

道ニ専心セシメン事ヲ計ラント期スモノナリ、尚專攻課目ガ一

層具體的ニ内定ノ者ハソノ旨併而申出ノ事)

昭和十八年九月九日 図案部教官室

(五) 昭和二十一年

昭和二十一年五月第一學期

第一週 全級各通

植物の圖案視野による寫生十種

第二週

一年級

浴衣圖案二種 全紙大 原寸

月曜講話 午前中約一時間。

一、自然物畫因の圖案化に就て

一、連續模様作法 廣川教授

二年級

繪日傘 内地婦人向 全紙大 縮寸

輸出向 其の側面圖(機構)

一、傘の表 絹地捺染 色彩任意

三年級

番茶器セット(陶器又は磁器) 全紙大原寸

一、土瓶 一個

一、茶碗 五個 繪替り

正側面圖模様配置

右各課題は第一週に發見したる寫生十週の内より取つて畫因となす  
べし

図案課題(自六月三日―至六月廿九日)  
第三週―第六週

第一年級

一、製図―兒童遊園地の休憩椅子一種 用紙半載

二、漆器圖案―色紙箱(大色紙(絵色紙八寸×九寸)ヲ入レルモノ 高  
二寸―三寸、螺鈿ノミニヨル裝飾) 用紙半載

三、ポスター的表現(研究)

(一)電球(一個又ハ數個) 色彩、黒又ハ黒濃淡 用紙1/4画用紙  
大

(二)省線駅、橋、工場、火見櫓、起重機其ノ他ニ見ル鉄骨建築ノ  
一部ヲ取材シ黒一色(又ハ灰色ノ二色)ニ單化表現スルコト  
用紙1/4画用紙大

第二年級

一、製図―婦人用手提ノ口金(又ハ木口) 五種

鍍金、彫金又ハ木彫、牙彫、可塑物等素材ハ任意トシ、其ノ  
開閉ノ機構ニ合セテ裝飾的要素ニ重点ヲ置キ袋部ハ形態ヲ圖  
示スルニ留メル

二、木彫透シ彫欄間

日本間ノ欄間、木材ハ桐、左右均齊ノ中、何レカ一方 縮寸  
適宜 正面圖

三、競技  
第三年級

一、少年音楽團ユニフォーム

或ル文化團体ニ属スル演奏者、見取図（淡彩）ノ他ニ細部ノ製作機構上ノ解説ヲ要ス、全紙大

二、銅像台座設計図案

ブロンズ実大胸像、地坪四坪以内、校庭、背景ニ洋風建物アリ、正、側、平面図ノ外ニ全体ノ見取図ヲ要ス、花崗岩ヲ主材トシ設計、建設費、凡ソ本校校庭ニ在ル程度ヲ限度トス

三、競技

以上、各年提出月日、六月廿九日

昭和廿一年六月三日 図案部教官室

告 一、

一、爾後圖案實習課題に係はる解説は其の週の月曜午前中に教官之に當る事とす

一、通常成績直ちに採点批評の後返却するを原則とすれども其の優秀なる作品は陳列として公開展示に役立たしむる爲め當分返却せず（従前）

告 二、

一、三年生は本五月末までに爾後又は卒業後に於ける圖案の専攻希望課目を可成卒直且つ細密に明記して教官室に書狀を以て提出すべし

例一、生産面に於ける各種工藝（細別）の指導者たらむとする者、官省、工場等々

一、市井に在つて宣傳又は商業美術に進まんとする者

一、習得せる圖案技能を基礎とし作家（工藝）たらむと志す者 等々

昭和二十一年五月

告 圖案部生徒

拜啓 今夏七、八、九の三ヶ月間登校不能となつた在學生の現狀を如何ともしがたく教官室は左の最小限度の宿題を課して成績を採り進行形態と致します。

昭和二十一年六月末日 圖案部教官室

圖案部生徒夏期休暇中宿題

一年生

一、寫生（植物）鉛筆淡彩 四切大 三十枚

一、自然物中より圖案美を發見し蒐集せよ 標本式に整理する事

一、ペーパーナイフと匙（木工）西洋紙半截大 各三種 原寸

一、裝幀 童謡集ノ草笛ノ背の厚さ一寸三分 四六版〔判〕和紙色彩・表紙のみ

二年生

一、寫生（靜物・雜貨工藝品） 四切大 三十枚

一、昆蟲を解体して其の機能的なる細部を郭大圖示せよ、画用紙大彩色〔判〕

大彩色

一、印刷物に依る外人觀光誘致案 画用紙大

一、燭台（金屬製品）二本以上の蠟燭又は電球使用一種、画用紙半截

半截

三年生

一、寫生（風景と人物） 四切大 三十枚

一、圖案作品(任意)

提出期日 十月第一週目

以上

昭和廿一年度後期

第一週(十月一日ヨリ  
十月五日マデ)

- 一、登校、勉學ノ爲ノ生活整理期間トス
- 一、製作材料其ノ他実習ニ必要ナル資材ノ調整期間トス
- 一、夏期休暇中課題ハ週末(五日)迄ニ整理シ同日正午迄ニ提出セ  
ラレタシ

十月一日 図案部教室

第二週(十月七日ヨリ  
十月十二日マデ) 図案課題

各年級共布帛類図案

第一年級 ネクタイ

- 三種、織柄、男、若向、何レモ普通路傍ニ見ル『落葉』ヲ画因ト  
スルコト 色任意

第二年級 クツシヨソ

- 刺繡ヲ扱ヘルモノ、主題ヲ鳥トス、裏面略、クツシヨソノ形ハ、  
円又ハ方形トス

第三年級 内地向婦人服地、二種

- 更紗(散点模様)ト縞、各一種、羽二重布地捺染ニヨル

各年級共、画用紙ノ大キサハ四・六半截

以上

十月五日 図案部教室

図案課題 各級共通

防火宣傳ポスター(下谷消防署ヨリ依頼サレタルモノ)

大キサ一新聞一頁大 色數一任意 記入文字一無し  
提出ノ切一十月十九日正午

枚數一一人一枚以上三枚迄 經費一実費提供ス  
作品展示一十月廿一日ヨリ廿七日マデ 於、上野松坂屋

以上

十月八日 図案部教室

告 各年級

一、第二週課題布帛図案ノ作品提出ヲ藝術祭施行後ニ延期ス

一、藝術祭ニ展示スベキ綜合制作並ニ個人出品制作ハ此レヲコンク  
ールト見做シ成績ニ採点ス

以上

十月十五日 図案部教室

追而、防火ポスターハ十九日正午迄ニ必ず提出致サレ度

第三週自十一月十八日(今週金、土、二日加算)全級課題  
至十一月二十三日 (但シ一年級自宅製作)

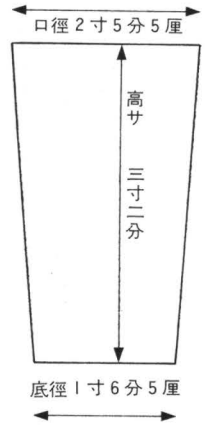
カットグラス図案(懸賞)

一、画用紙十六截ニ二図宛、三枚六図ヲ責任製作トシソレ以上ノ提  
出ヲサマタゲズ、

一、鉛筆ニテ明確ニ描寫シカットサレタ模様ノ部分ニ空色ノ淡彩ヲ  
施スコト

一、参考品陳列一今回所望ノ品ノ現物寸法、左ノ通り、





- 一、原寸、正側面ニ圖案スルコト
- 一、姓名ハ裏面ニ書クコト
- 一、優秀作品ニ対シ等級別ニ賞金ヲ與フ、
- 一、提出締切 二十五日(月) 正午

昭和廿一年十一月十四日 圖案部教官室

以上

第四週(十一月廿五日) 實習課題

- 第三年級 内地向婦人服地圖案二種
- 更紗(散点模様)ト縞 各一種 羽二重布地捺染ニヨル、
- 画用紙ノ大キサ 四・六半截
- 提出期日 十二月二日(月) 正午

昭和廿一年十一月廿二日

以上

實習課題

- 一年生 ネットタイ(織物)三種 落葉を画因とする事。
- 二年生 クツシヨン(刺繡) 形・任意 画因・鳥類。
- 三年生 競コンクール技 又ハ卒業製作草案提出。
- 懸賞課題 衛生綿包装圖案 ノ切 十二月廿日

昭和八年の規則改正で予科一年間、本科四年間の修業課程が定められ、圖案科は工芸科圖案部と改称されたが、圖案部では予科でまず構成の基本、古典的文様の学習、模様の考案等、圖案の基礎学習を課した。島田時代には「便化」と称する模様の考案が学習の大きな部分を占めており、対象を写生してアールヌーヴォー的模様形体にまで圖案化し、充填模様や連続模様その他を作ることが行われたが、改革後は模様考案の占める割合が減り、しかも、模様考案の際には従来の「便化」に代わって「解体組織」という方法が示されるようになった。それは自然物や人工物の形を分解して、要素を幾何学的形式に再組織することで、はじめ生徒はそれが理解できず、文庫で立体派以後の絵画を見て意味を探ろうとしたりしたという。後出(97頁)の大智浩の文は生徒にどのように理解されたかの一例である。ただし、関係者の話によれば、模様制作の割合が減ったとはいえず、圖案を紙上に描き表す際の技術の訓練を重視する従来の伝統的な方針は踏襲され、また、絵画へ傾きがちな傾向も尾を引いていたようである。

本科では課題を徐々に応用分野へと広げ、生徒を受験予備訓練の学習から解放して生活の周辺に目を向けさせ、新鮮な発想を呼び起こすような配慮がなされた。課題は照明器具、浴衣、ハンドバッグ、洋髪、海着、ラディオ、ステンドグラス、ネオン広告、ポスター、家具その他バラエティーに富んでおり、今までとは違った勉強方法が必要になったと考えられる。

現代生活に目を向け、平面、立体を問わずさまざまなテーマを取り組むようになったことは、従来の狭い「圖案」観念から生徒を解

放し、より広い「デザイン」の認識を植えつける結果となった。當時はデザインという言葉は洋裁の方面で使われていただけで、工芸分野での使用が一般化するのには第二次大戦以後だが、図案部ではこの改革の頃から盛んに使われ始めた。そして、生徒たちはデザインとは何かという新たな問題意識を持って勉強に取り組み、そこに戦後新しいデザイナーたちが活躍する基盤が作られた。しかし、新鮮な発想、現代生活に即応したデザインということに重点を置いた教育改革は良い結果をもたらしたとする意見に対して、改革以後、古めかしい指導法ながらも生徒に日本の伝統を深く学ばせることによって基礎的な力をつけさせ、それを土台にして各自新しい方向を開拓させるという島田時代の基本の方針が崩れたこと、あるいは生徒一般に巧緻な表現技術を欠く傾向が生じたことを批判する意見もある。

#### 四、夏季休業中の教室使用禁止

昭和七年六月二十二日、和田校長は主任、理事、教授会議を開き、その決議に基づいて夏季休業中の生徒の教室使用を禁止することとし、同二十四日、各教員に通達した。例年、夏休み中は秋の官展出品を目ざす生徒たちが教室を借りて制作に邁進するのが常であったが、和田校長は前出の「かく信じ、かく行ふ」の主旨に基づいて断乎これを禁止した。これに関連して翌八年には「生徒心得」を改正し、生徒の展覧会出品を制限する措置もとられる。

#### ⑨ 海野清の在外研究

金工科教授の海野清は、昭和七年六月一日、文部省より金工技術研究の為、満一年間フランス在留を命じられ、帝展審査を了えて十月十八日に東京を出発。同九年一月十四日に帰朝した。

海野清は海野勝珉の四男として明治十七年に東京に生まれ、早稲田大学法科中退後、同三十九年、本校金工科に入学。叔父の海野美盛（水戸派）と清水南山（加納派）に師事した。大正六年に本校金工科助手、同八年に助教授に任ぜられ、昭和七年三月に教授となった。中野政樹「海野清・人と作品」（『人間国宝シリーズ』28 佐々木象堂／海野清／魚住為業、昭和五十四年、講談社）によると「プロフェッサーと呼ばれるまで外国に行かないよ」とつねづね言っていた海野は、教授となった年に渡欧した。教授であったためにルーブル博物館、大英博物館、エジプト博物館等でも、一つ一つ手にとって調査研究することができた（海野重男氏談）という。滞欧中の足跡については未詳だが、目的は、フランスを中心に西欧の金属工芸の技法を研究することにあつた。彼は元来、水戸派彫金の正統な継承者で、特に毛彫の技法に秀でていたが、この留学により西欧技法を採り入れ、また技術面以外に、金属工芸の理論家としても完成されて行くことになる。帰国した年の帝展出品作品「青銀花器」は、胴の左右にスカラベを打出した鏤付、中央にロータスの花をあしらったもので、古代エジプト芸術の影響を強く受け、西欧の造型と日本の伝統技術がよく融合して新しい日本工芸の傾向を示したものと評価された。

#### ⑩ 「天心岡倉先生」の寄贈